

「まあここはひとつ、同期のよしみってやつでさ。……なっ？」

その人なつつこい笑みに負け、連れてこられた資料室 そこにあったのは、山と積まれた紙束。

「いやあ、こんなの俺ひとりじゃ片付けられねえもんなっ。」

そこに暇そうな鑑識官が通りがかったら、使うのが常識ジョーシキってもんだ、うん」

つるぎ ほづま

鶴来秀真は、偶然そこを通りがかったことを心の底から後悔した。

秀真：(ダイスを振る) 侵食率は4上がったぞ。

GM：今日は4が多いねえ。……では、埃くさい F 市警察署の一室から。あなたは鑑識官のはずなのですが、何故か交通課の資料室にいます(笑)

秀真：(ハンドアウトを見て) 調書の整理だな。

GM：ええ。あなたが偶然廊下を歩いていたところを、グイッと引っ張ってこられたわけですよ。

ぱっちりハンドアウトに書いておきながら「偶然」もないものである。

秀真：じゃあ面倒くさそうに一枚ずつめくりながら「なあ……、俺が……鑑識だって知ってるか？」

GM：「ん？ よおく知ってるぞ。鑑識って事件が起きてないと……(爽やかに)暇なんだよなあ！」

秀真：……消防署と警察は儲からないほどいいって言うじゃないか。

GM：「だから、過去の調書を整理するのがシゴト、つてのはいいことじゃねえか！」

秀真：それは交通課のお前の仕事で、俺は鑑識官だと言ってるだろうっ！(笑)

おっしゃる通りです。

GM：「まあ、そこにたまたま友人ユージンが通りがかったら……使われるのは運命、ってもんだろ」

秀真：昨日まで徹夜だったんだぞっ……、……ネットオークションで(笑)

一同：そんな事情で徹夜かよっ！(笑)

GM：ま、そんなことやってるとですなえ。ガサッと(書類が)崩れるわけですよ。

秀真：(世にも情けない声で) ほひゃああああ……！(悲鳴)

……誰もそこまで言っていないのだが……何故自ら埋もれるのか、この人は。

GM：埋まるほどじゃないよ(苦笑)。机の下にざーっと雪崩なだれるぐらいで。

譲：(いきなり友人になって)「鶴来い！ 何すんだよ～」

GM：いや、相方の方が崩したただけだね。「えへっ」という感じで拾っています。

秀真：(書類を拾う手振りをしながら) だいたい、お前ら何年分貯めてんだよ……。

GM：ほほう、手伝うんですね。じゃあ、滑り落ちてきた書類があなたの足下に。

---

手伝うんですね 書類を拾うのを NPC の刑事に任せただけの場合は問題の書類に気付くか、知覚 判定を行わせることになっていた(失敗したら NPC が騒いで発覚する)が、秀真が善意の行動に出たので判定を省略した。PC の行動により、展開に微妙に変化が生じた分かりやすい事例である。

秀真：何となあく手に取る。

GM：あなたの知った名前がありますね。

秀真：ほう。

GM： 咲島綾華。あなたの友人でもある宇佐美さんの従姉妹です。

秀真：友人の従姉妹なんてよく知ってるな。

GM：ん。顔は知らないけど、名前は聞いたことある……ぐらいかな。

秀真：なるほど。どっかで聞いたことある名前だな、と思いながらよく読んでみるけど。

不意に、革靴の爪先に当たった書類がふたつにばらける。

……最初は、仕事柄目にする書類に知った名前が刻まれている、という偶然に驚いただけだった。だが、書面をなぞっていくにつれ、秀真はその二枚が奇妙な関係にあることに気付いていた。

この二枚、書かれていることがほぼ同じじゃないか……。

GM：作成日以外の違いはおおむね一点に集約している。書かれた日付の古い方では「死亡事故」とあるのが、その五日後に作られた調書では 被害者は「重体」になっている、ということ。

桐子：……逆じゃないんだ。

秀真：……………。

GM：あなたが無言で立ちつくしていると、後ろから同僚が覗き込んできて「ん？ 同じ名前の調書がにま……はあ？ 何の書き間違いだ？（調書を指で示して）……お前どう思う、これ」と。

秀真：どう思う、って……お前は知らんのか。

GM：「いや、これ俺の担当じゃないし」この調書の作成者は彼ではなく、別の名前ですね。

秀真：ふむ。手に持った書類を見ながら、何となく嫌な予感が（苦笑）

同じ発生日、同じ発生日所、同じ関係者名。

単純に考えるなら、調書作成者の書き間違いだ。そう 単なる書き間違い。

だが、“人ならぬモノ”の力シネガイド・ワイルズで研ぎ澄まされた感覚が、微かすかな違和感を訴えている。

「まあ、書き間違いだとは思うが、……………書き間違い、だよな……？」

狭い資料室 その中に、秀真の疑念を晴らすことの出来る者はいなかった……。

\* \* \*

桐子：(後ろの方で) うう～いるすつ うう～いるすつ

譲：……これは、一体……。と、鶴来は洪くつぶや (勝手に演出)

秀真：(それを遮り、死ぬほど爽やかな口調で) ああこれ、書き間違いしてるよ(笑)。

GM：おい待てノイマン！(笑) グダグダになってきたので、とっととシーン切りましょう(笑)。

---

ノイマン 念のため、参考までに述べておくと、ノイマン・シンドロームを発症した人間は記憶・分析・演算能力に優れた“人間コンピュータ”に変貌する傾向にある。よって、このシンドロームを持つ者は常人レベルで考えれば例外なく“天才”と呼ばれる部類に入る。……………一応、念のため。

空が白み始める直前、<sup>あくび</sup>欠伸を堪えながら、<sup>ほしま</sup>帆島 <sup>ゆずる</sup>譲は支部長室のドアの前に立っていた。  
緊急の呼び出しなど、<sup>いつものこと</sup>日常茶飯事 そのはずだった。……室内で、あの声を耳にするまでは。

GM：じゃ、大トリ（笑）。早朝ですが、緊急の呼び出しで支部長室前へ来た、という感じです。  
譲：（やる気なさげに）……しっつれいしまぁす？ かちや。

どこがやる気のあるキャラなんだ。

GM：……では、あなたが中に入ると支部長が話を始める。「こんな早朝の呼び出しにも関わらず、よく来てくれました 今から二時間程前、この支部の仲間が“狗”と呼ばれ、殺されました」

譲：……“狗”、ですか。

GM：で、彼女がボタンをぼちっと押すと、後ろのスピーカーから音声データが再生されます。

「……ぐはっ！ 支……部長……じゃ、ない……!？」

「フフ、“ロード・オブ・アビス”の反乱から、まだ UGN は立ち直っていないと見えるな？ このような質の低いエージェントばかりとは、な」

「お前は……だ、れ……だ……」

「もしも天国というものがあるのなら、“ザ・フェイト”に殺されたのだと語るがいい。

もっとも、このような<sup>ザ・ユウキ</sup>雑魚を殺ったところで、私の株など上がるまいが、な……」

「支……部長……、聞こえていますか……“ザ・フェイ……ッ」

鈍く湿った、何かが砕ける音が“彼”の声を遮った。微かだった雑音が一瞬でひどくなる。

GM：「……おや。これは、油断し過ぎたか。早く引き上げねば、狗どもがうるさく<sup>ほ</sup>吼えそうだ……では失礼するよ、無能なる UGN の諸君」ここで、硬い破壊音と共に音声データが終わるね。ちなみに、今の会話の中であなたの同僚の声に呼応していたのは、支部長の声色に聞こえる。

譲：二、三步後ろに下がりながら「し、支部長……！ あなた、まさか……ッ!？」（笑）

GM：えー、支部長は……そうだ、“こいのぼり”が臨時で派遣されてたってことで！（一同爆笑）

単に有名 NPC で、かつ臨時の支部長として出せそうな人物として登場させたのだが……。

偶然にも、彼女はかつて部下殺しの疑惑を受けて UGN に監視されたことがあったのだった（爆）

GM：うお！（笑）……<sup>ゆうき</sup>結希は「わ、わわ私じゃないですよ！ 信じてくださいい～っ」と（笑）

譲：（シリアスな口調で）その……一度、訊いてみたかったのですが。よろしいでしょうか。

GM：「な、何でしょう」（笑）

---

“ロード・オブ・アビス”の反乱 富士見書房から刊行されている文庫リプレイ『闇に降る雪』で描かれた事件のこと。この事件により UGN 日本支部の力は大幅に衰え、混乱期を迎える。

こいのぼり 葉王寺結希（やこうじ・ゆうき）の通称。ノイマン・ピュアブリードの保持者で優秀なエージェントだが、しばしば部下全滅の憂き目に遭う（『闇に降る雪』『聖夜に鳴る鐘』参照）。ちなみに“こいのぼり”の由来は“こいのぼりの如き凹凸のない幼児体型”だそうである（by 菊池たけし氏）。

譲：何故、あなたは未だに“支部長”を続けていられるのですか（一同爆笑）。

GM：さめざめと泣いています（一同笑）。

譲：それはともかく。（真顔に戻って）今の声は……！ “熊” 仙台熊太郎、なのですね……？

GM：あ？ 熊太郎になったんだ（笑）。

譲：（キャラクターシートにきゅつきゅっと書きながら重々しい口調で）今、「郎」の字がついた。

桐子：書き足すなよっ!?（爆笑）

GM：話を戻そう（笑）。彼が調査していた周辺を搜索した結果、警察に知られるより前に遺体が発見された。結希が「……この通り、“ザ・フェイト”と名乗る FH のエージェントがこの市に入り込んでいるようです。あなたには、この件に関する調査及び対処をお願いしたいのです」と続けるね。

譲：（ぼそりと）あなたのコードネームは“運命の導き……いや何でもありません。

結希を出したのはその場の思いつきなので、<sup>コードネーム</sup>二つ名が似ているのは偶然である。いや、本当に。

GM：「……残念ながら、F 市支部にあなたの支援に回せる戦力が残っていないのが現状です。市内のイリーガルとも柔軟に協力してこの任務を遂行出来ると信じて、あなたにお任せします」

譲：ふむ。（ちろーり、と英達のプレイヤーを見る）人づてを当たってみよう（一同笑）。

GM：彼女は「それではよろしくお願いします、“ケルティック・シャーマン”」と話を結びますね。

譲：分かりました、“<sup>フェイト・インジケーター</sup>運命の導き手”。あなたの無実を晴らすためにも、努力させていただきます。

……だから偶然だと言っとるだろうっ（笑）。

譲：……が、その前にひとつだけ。“熊”に 別れの言葉を、言わせてください。

GM：「ええ。仙台さんの遺体は地下の霊安室に保管してあります」（素で言い間違えた）

一同：ほ、保管っ!?（笑）

GM：違う、安置だった（笑）。「どうぞ、彼に<sup>さいじ</sup>最期の別れを」 遺体の引き渡しはもうすぐだ。

「それでは……」言葉少なに退出してから、譲は建物内を迷うことなく階段を降りていった。

霊安室を訪れるのも慣れている。どんな<sup>キレイゴト</sup>綺麗事でも飾ろうが、FH との戦いに“死”は付き物だ。だが、こんなに喪失感に身を<sup>や</sup>灼かれながら遺体を見下ろすのは、初めてのことだった。

\* \* \*

譲：（嘆くような絶叫で）くっ…… “熊” アァァ ツ!! 馬鹿な……ツ、お前が殺られてしま  
うなんて……！（一同超爆笑） お前は“狗”なんかじゃないっ…… “熊” なんだぁ !!

一同：そこかよっ!!（爆笑&総ツッコミ）

GM：すっげえ強烈なオチだな（笑）。

譲：（わなわな震えながら）……な、ナニこの楽しいキャラクター！（一同爆笑）

GM：（英達のプレイヤーに向かって爽やかに）頑張れっ！ 喰われるなっ、主人公（笑）

英達：（卓に“の”の字を書きながら、ぼそりと）……………ボク、主役辞めよっかなあああ……。

---

イリーガル UGN に所属しているわけではないが、オーヴァードが関わる事件の解決において UGN の協力要請（もちろん報酬がある）を受けることのある人物。譲以外の PC は全員イリーガルである。